

植物から見た水辺環境の重要性

大阪市立自然史博物館 藤井伸二

Significance of wetland on Plants, by Shinji Fujii (Osaka Museum of Natural History)

水辺環境には、湖沼、ため池、水田、河川、水路、湿原、貧栄養湿地、塩性湿地、磯、干潟など実にさまざまなタイプが含まれている。そしてそこには植物の繁茂が見られることが多い。近年、水辺環境の悪化や喪失が指摘されるようになり、そこに生育する水辺の植物(主に水草類)の保全が注目されるようになった。しかしながら、これほど多岐にわたる環境群を「水辺」という言葉でまとめあげてしまうのは、あまりにも乱暴だろう。ここでは、植物を通してさまざまな水辺環境を概観し、各環境の特質と多様性の意義について考察したい。

原野環境：近畿地方の琵琶湖・淀川水系には、広大な氾濫原が存在する。現在はその大部分が都市化や農地化によって失われたが、琵琶湖岸や宇治川向島地区、淀川鶴殿地区などに名残をとどめている。過湿な草原環境を好む植物が豊富で、サデクサ、ナガバノウナギツカミ、ノウルシ、コバノカモメヅル、オニナルコスゲなどが代表例である。また、頻繁な河川氾濫を好むタコノアシやミゾコウジュが生育する。これらの植物種の多くは、近畿地方での分布が琵琶湖・淀川水系に限られる。この理由は、近畿地方では大規模な草原環境が琵琶湖・淀川水系に限られることに関係があると推測される。琵琶湖・淀川水系の広大な草原環境(=原野)は独特の植物群を持つ水辺環境であり、河川氾濫が環境維持に大きく貢献していると考えられる。

ため池：ため池の大部分は、農業用水の確保を目的に人工的につくられたものである。とくに、瀬戸内地方では、夏期の灌漑目的のために無数のため池が存在した。ため池は河川のような急激な水位変動や強い掃流

が少ないために、沈水植物・浮葉植物にとって生育しやすい環境である。また、構築環境や技法と水源に応じて水深、水質、底質などが多様で、それらに応じた植物種の生育がみられる。このため、西南日本における水生植物の生育環境としては、もっとも重要な存在となっている。各種のタヌキモ類、コウホネ類、ヒルムシロ類、そのほか無数の沈水・浮葉植物群がみられる。数千年にわたる農耕(主に稲作)が、水辺の生物の多様性維持に大きく貢献した例と考えられる。

水田：浅い沼状の環境で、水田雑草と称される各種の水生・湿生植物群が繁茂する環境である。定期的な除草と耕耘・灌水により、毎年裸地的な環境が維持される特殊な環境であるため、水田環境(休耕田を含む)に生育が限られる植物群をみることができる。ミズワラビ、ミズマツバ、マルバノサウトウガラシ、アブノメ、シソクサ、イトトリゲモ、ホシクサなどが例としてあげられる。ため池と同様、稲作が水辺の生物の多様性維持に貢献した例であろう。水田依存型の植物は、従来は「雑草」としての認識しか無かったために、水田耕作以前にどのような環境に生育していたかなどの歴史的・生物学的背景は不明である。

貧栄養湿地：東海地方から近畿地方中部および瀬戸内地域にかけては、貧栄養の灌水によって成立する小規模(面積は4畳半にも満たないものが多い)湿地群が特徴的に見られる。この地域は、大阪層群・東海層群あるいはそれらに相当する層群が卓越し、小規模な滲出水(湧水)が多い。そうした環境では、ヤチスギラン、モウセンゴケ類、ミミカキグサ類、シンジュガヤ類、イヌノハナヒゲ類などが生育する。また、東海丘

陵要素とされるミズギボウシやヘビノボラズを見ることが出来る。貧栄養湿地の特徴は、個々の湿地の植物相は貧弱だが、湿地ごとに異なる種が生育するために、湿地群全体としては非常に多様性が高い独特の植物群集を創り出していることである。

塩性湿地：塩分の影響を受ける湿地で、近畿地方では瀬戸内地域や紀伊半島に見ることが出来る。瀬戸内地域のもは干潟後背や河川河口部に成立するタイプのもが多い。一方、紀伊半島のもは海跡湖地形によく成立する。植物相は両者ではかなり異なるが、塩分に耐性を持つ植物群に特徴があり、ハママツナ、ハマサジ、フクド、ウラギク、シバナ、ナガミオニシバ、アイアシ、イセウキヤガラなどがその例。また、ハマナツメのような遺存植物やハマボウやハマジンチョウのような準マングローブ植物の生育を見ることがもある。

ここでは、湖、小河川、水路、溪流をはじめ、南西諸島で重要な礁湖の海草環境、東日本で重要な高層湿原などの概観は割愛した。それゆえ、多様な水辺環境のごく一部を紹介したに過ぎない。しかしながら、「水辺環境」がいかに多様であり、そこに生育する植物種の背景が複雑であるかを見ていただくことができたと思う。偶然できた環境（たとえば水田やため池）に進出したと類推される植物群のある一方で、遺存植物を育む環境（原野、貧栄養湿地、海跡湖などかもしれない）もある。こうした、水辺環境の個々の特性を、そこに生育する植物群から読みとることが、保全への一助になることを願っている。

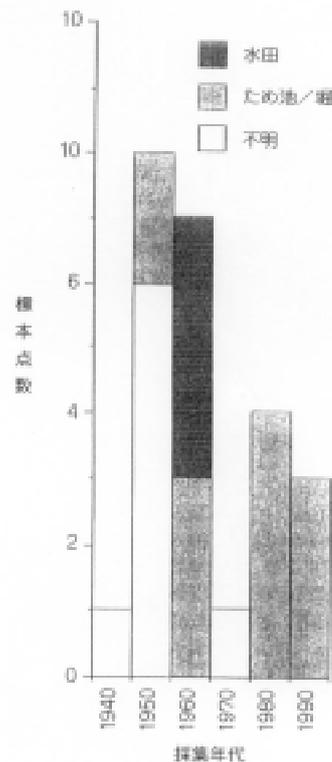
図版の引用

藤井伸二．1994．琵琶湖岸の植物 - 海浜植物と原野の植物．植物分類地理 45：45-66．

藤井伸二．2002．地方版レッドデータブックの成果と問題点．(種生物学会(編)保全と復元の生態学 - 野生生物を救う科学的思考)．文一総合出版．pp95-107．



原野の植物の分布の一例 藤井(1994)



大阪府におけるサンショウモの生育環境の変遷

藤井(2002)

大阪府におけるサンショウモの生育環境の変遷 藤井（2002）